

「八大龍王」（はちだいいりゅうおう）

①「八大龍王の御名とおはたらき」

難陀(なんだ)、跋難陀(ぼつなんだ)、沙伽羅(さがら)、和(わ)脩(す)吉(きつ)、徳叉(とくさ)迦(か)、阿(あ)那(な)婆(は)達多(たつた)、摩那斯(まなし)、優鉢羅(うはら)の八大龍王の総称。法華經の会座に列した護法の龍神。八大龍王は、釈迦生身の眷属で、釈迦生誕の砌、彼等が天より甘露を降らせ祝福したともいう高い神格をもつ龍神。水を司どる神、水分の神でもある。その勝れたるものは、自由に雲を起してその中を飛翔し、殆ど天と等しき威徳あるものとして顕教、諸教に多く説けり（密教大辞典）とある。「妙法蓮華經」の中の觀世音菩薩普門品の別称を「觀音經」といい、我国では聖徳太子により最初に講じられているが、釈迦がこの中で觀音に帰依すれば「觀音が身を三十三身に変じてあまねく衆生を救い、願いを叶え、教化して下さること」を説いている。十六弟子を始め、諸仏、諸菩薩と共に、生きとし生けるものの代表として八首の龍王が幾千万の眷属をひきつれて、この經を聴聞した結果、觀音の教化によつて、仏道に向かわれた神でもある。従つて觀音菩薩の宝珠（魂）をその身に宿されて、觀音と一体となり、觀音菩薩の守護神となつて靈山の「神々と諸仏、諸菩薩」との橋渡しの役割をされた神ともいえる。異質なもの（神と仏）との和合を願つた「釈尊、聖徳太子、役行者」の共存共栄の大きな世界実現に大きな使命をもたれている神であることが解る。奈良時代前後に成立した靈場には、例外なく〇〇龍神や八大龍王、又はこの中の一、二首の龍王が祀られ發展してきた歴史がある。しかし八大龍王全首奉斎されてたり、神格の高い神々と習合しているところは意外と少ない。（明治維新時にかくされてしまった神々だが、時の要請に従つてあちこちで復活の話も取り沙汰される昨今である。）

密教大辞典（法蔵館）には、各龍王の神徳について次のように記されている。「難陀」は歡喜、「跋難陀」は賢喜、亜歡喜、難陀の兄弟。「沙伽羅」は海の意、請雨法の本尊。印度無熱池に住し密教の守護神。「龍女成仏」はこの龍王の女の成仏を説く。「和脩吉」は宝有、多頭、九頭龍のこと。「徳叉迦」は、多舌、毒視、和脩吉と同胞。怒つて凝視すれば、人畜直ちに命を終える、と。「阿那婆達多」は無熱。雲山頂の池に住み、四大河（東ガンジス、南インダス、西オクサス、北シーター）を分けて、人間世界を潤す、一切馬形、徳が最も高い。「摩那斯」は大尉、高意、慈心、大力大身、雨を降らせんとするとき、七日衆事の終わるを待つて、それから雨を降らす、故に慈心と那尽く。「優鉢羅」は青蓮華と訳す。青蓮華池に住する故にこの名あり・・・と。

②「龍の起源」 難陀(なんだ)はサンスクリット語「ナーガ」からきている。インドのナーガ族が、蛇を神格化して蛇神崇拜をした。日本にきて、イザナーギ、イザナーミになったという説もある。大海に棲み、雲を呼び、雨を降らす秘力を持つ。神格の高い龍を龍王と称えた。「龍神は『カ(火)とミ(水)』で「神」の語源とも。水は潤いを意味し、恵みに通じる。水と觀音菩薩の『恵みと慈悲』は、万物の命を支え育むところからも『不離一体』といつても過言ではないだろう。」（天台宗元宗務総長川\*長徳寺住職江田廣典師、埼玉タイムス、平成八年）とも言われている。

③「龍泉、龍樹、龍穴の信仰と和脩吉、沙伽羅」 龍神への祈願については、桓武天皇の御代（八二四）に空海の請雨により神泉苑の龍上天し、雨振る（江談抄）とか、「弘法大師早魘の時神泉苑にて請雨經を修するに、天竺の阿耨達智池より善女龍王きたりて雨を降らす」とかは、我国最大の古代説話集の今昔物語に記されている。善女龍王とは沙伽羅の

第三女善女龍王。やや前だが、役行者開創の宝生寺の龍穴神社で、宝龜年中（七七〇〜七八〇）、皇太子時代の桓武天皇の病氣平癒が僧侶により祈願されたと続日本書紀にある。又、鎌倉時代橋成季の成した古今著聞集には、澄憲、災早の時龍神に祈りて雨を降らすともあり、神泉や龍穴と共に龍神への信仰の大きさを知ることができる。

奈良県天川村の龍泉寺も、圭室文雄編「日本名刹事典」によれば、「開基の役行者が八大龍王を祀ったことに始まる。」と記されている。ここには「竜の口」の伝説がある。この泉は今も大峯山修験者の清めの水として清冽な流れをこの寺の林泉にたたえている。この外、奈良県吉野山の金峰山修験本宗の総本山は、役行者が、蔵王権現を感得した寺として有名だが、傍らの行者堂を下った処にある「龍王院」では、先代五条覚澄師が八大龍王と共に脳天大神を祀られている。愛媛県西条市石鎚神社の「八大龍王社」（成就社）。高野山の八大龍王は弁天さんとして祀られている。一は天川系、二は高野山系である。二は、独自で山の周辺にいくつか祀られている。御神体は木彫りの二つの蛇体で、その上に頭があり、顔は人面で翁と嫗である。（奥の院維那日野西真定師談）。そして千葉県市川市の「法華経寺」には文応元年（一二六〇）になって日蓮により、八大龍王が祀られている。

九頭龍の名は比較的多くの人に知られている。この龍王は、八大龍王の中の一首で「和脩吉龍王」のことである。諸龍の王、細龍の類を食う密教擁護の善神といわれ、水天の眷属でもある（望月仏教大辞典）。長野県「戸隠神社」、（元比叡山延暦寺末寺）「箱根神社」の湖上祭の御祭神も九頭龍である。金龍山の山号に輝く浅草寺の境内にも九頭龍権現が祀られている（浅草寺参照）。又、福井県の九頭龍川野流域には、九頭龍権現の小祠が多くみられる。

次に、清龍権現で知られるのが沙迦羅龍王の第三女善女龍王である。密教では如意輪観音の化身として崇められている。弘法大師帰朝の祭、青龍寺から勧請して青瀧と改め、聖宝の代醍醐寺に移した。現山上の清瀧堂は国宝。沙迦羅龍王と「龍女伝説」で名高いその女を祀っているのが、山形県鶴岡市の善宝寺。庄内札所一番でもある。明治維新直後から八大龍王の御名を秘して、「戒道大龍女」の別称で祀られている。沙迦羅は海の神、請雨法の本尊で、現在も神職の参詣も多いという（住職斎藤信義師談）。

④「八大龍王と役行者」 八大龍王は役行者II役小角（六二四〜七一〇）が奉斎したことで知られる。役小角は聖徳太子没して十二年後、\*明六年に葛城山の麓、茅原の里（現御所市）に出雲の加茂氏と葛城氏の娘との間に生れ、仙道、道教、古神道、仏教を学んだ。これに満足せず、人間完成への探究と実践こそ神仏の境地到達の道であり、国家安泰、万民幸福の道である（今宮神社資料集、平成七年）、と悟り、更に難行苦行し、箕面山で龍樹から乱れた世を救う悲報を授かった。吉祥草寺、蔵王堂をはじめ、関東では日輪寺（茨城）、大平山三吉神社（秋田）、金嶺神社（山形）、熊野神社（山形、温海町）など、役行者開基や何らかのかかわりをもったと伝えられる寺社は四十余ヶ寺数えられるという。それ程に力を持った役行者については、「超人、役行者小角」（志村有弘、角川書店、平成八年）に、「神変不可思議、得体の知れぬ謎の超人」と述べられている。

その役行者が十一才の時（六四五）に、大化改新を迎えている。三十八才の時には、壬申の乱（六七二）で天武軍を援け、その後天武帝に重く用いられたといわれている。真剣に国家安泰、万民幸福への道を探り、衆生を教化して、人々を仏の道に誘うことを願って「行学」の限界を修め、遂に神仏習合の神々を時と処に尋ねて、祀っていった。その結果、

農耕国家かつ仏教国家にとって「水から生れる発想や自然の摂理」を祀ることと共に、「国家安泰、万民幸福」を国家的規模で祀る重要さを感じていたことが推定できる。「水と観音」が一体となった姿、それが八大龍王でありそれは、万物の生命の根元であり、愛でもある。そして生きる力でもあり、真理である。

「役行者はなぜ八大龍王を秩父に祀ったか」

六九九年に伊豆に流された役行者は、七〇一年に罪を許されている。その後箕面に住んだが、その頃知々夫（七二三年に秩父となる）の地に訪れている。その地には既に御巫八神が祀られていたからに他ならない。そして八首の龍王（八大龍王）を合祀して八大宮と称した（御巫八神の項参照）。神界で最高の神格をもたれた八神と、仏界で大日経系の胎蔵界の最高尊格を持たれる大日如来との橋わたし役をされる使命を八大龍王にみたのであろう。観音菩薩と不離一体であるという八大龍王の（御神徳⇨力⇨教え）に、役行者は、将来の希望即ち国家安泰、万民幸福の願いをたくさいたのではなだろうか。「・・・その後相州の八菅山（七〇三）そして和銅三年（七一〇）に入定した。」（志村有弘、超人役行者小角）という。果たせるかな、秩父はほどなく、行学を修め、人間探求と実践並び神仏の境地到達の道を求める修験道の一台拠点（聖護院直末寺、大先達）となり、その後五百〜八百年を経て天文五年（一五三六）観音札所三十四ヶ寺が整えられた。そして江戸の発展に伴い、多くの巡礼を受け入れ、観音札所と八大現社（今宮八大宮）は共々盛んとなった。しかし、明治維新と太平洋戦争配線の荒波と、観光商業主義の世情の中に、御巫八神と八大龍王を祀る八大宮はしずまられ、およそ百三十年の間、お隠れになる日々を余儀なくされたのである。

⑤「明日を拓く水分の神」 明治維新から百三十年、再び「水」の神徳を求め人が増えて、八大龍王はあらためて水の神として、又、神と仏の橋わたしの使命をもたれて顕れ出られる時を迎えようとしている昨今である。このような時を迎えることが出来たのは、昭和から平成にかけての観音信仰、札所めぐりの復活である。特に百観音めぐりを世に出された浅草寺清水谷孝尚師、満願寺平幡良雄師の尽力は特筆されていくだろう。かつては御巫八神⇨八大龍王⇨観音菩薩という順序で祀られた神仏だが、激動の明治⇨平成を経て観音菩薩⇨八大龍王⇨御巫八神の順で光があてられていくのだろうか。三者が揃った時、いかにすばらしい世になるのか想像して見たくもなる。いずれにしても、時代が大きく動くとき、価値観の移動がなされる時に働かれた神であったらしい。時代の要請で平成九年\*サミットが長野の上田市の提唱で開催された。そして平成十一年は奈良県の舟生川上神社で開かれるという。

しかし、時代のうつりかわりをよそに、龍神信仰の珍しい神事の一つに秩父今宮神社の水分祭がある。これに先立って毎年四月四日、龍神木前で、龍神を称える龍神祭。続いて今宮神社の「水分祭」が行われる。この水は武甲山の伏流水がわき出しているところである。この日は秩父神社のお田植祭（祈年祭）でもあり、秩父神社から神官、伶人、神部（かんばん）（農家の代表）、市や町会の代表者が「水乞い」に来られる。今宮神社から秩父神社に八大龍王並びに八神の御神徳⇨※生きとし生けるものの生命の源、生成発展の力⇨を「水幣（みずぬさ）」に託して授与する日である。水幣は八大龍王（明治期以降は\*（おかみ）の神）即ち「水」と「自然の法に則した教え」の象徴でもある。この恵みによって秩父神社のお田植え祭が行われる。そして秋になると稲が収穫され、新穀が秩父神社から今宮神社へ奉納され、そして水は山（武甲山）へ返される。神々を称え、そして感謝するおまつり、それが十二月三日の秩父神社の夜祭で、豪華な付祭はあまりにも有名である。

龍神様の卵好きはよく知られる。この外、神共には毎夜丑の刻、米三升を炊いて供え又、特に梨を好まれる。

「時により過ぐれば民のなげきなり、八大竜王雨止め給え」（金槐集、源実朝）は、建暦元年七月洪水天に漲（みなぎ）りて土民苦しみしかば右大臣実朝が詠じた歌として知られる。

#### 【参考文献】

志村有弘「役行者小角」（角川書店、平成八年）・野村敏晴編「異端の神々」（志村有弘、八大竜王、新人物往来社、一九九五）・圭室文雄「日本名刹事典」（雄山閣）・銭谷武平「役行者伝記集成」（東方出版、平成六年）・宮家 準「修験道辞典」（東京堂出版、昭和六一年）・志村有弘「秩父今宮神社と役行者」（かたりべB、平成六年）。室生寺資料（平成古寺巡礼展）・戸隠神社編「戸隠信仰の歴史」（戸隠神社、平成九年）・今宮神社取調書（明治二十八年、秩父市立図書館蔵）・「密教大辞典」（法蔵館）

塩谷 治子

この文章は「日本説話伝説大事典」収録のために作成されたものです。立春祭に作者塩谷治子から今宮八大竜王様に奉納されました。今宮神社崇敬社の方にコピーして進呈していただきましたが、サイト開設にあたり多くの皆様に読んでいただけるようPDFとして公開いたします。